

E-10 子どもの両親にたいする役割期待 —— しつけを中心として ——

香蘭女短大 斎藤潔子

目的 戦後、家族構成と家族関係の変動にともない父親・母親の役割も変化した。最近の子どもは両親になにを期待し、父親・母親はみずからの役割をいかに認識しているか。とくにしつけを中心に、親と子の役割期待の相関を確かめることにより、両親と子どもとの関係改善の予備資料を得ようとした。

方法 福岡市内の小学校5年生と6年生およびその父親と母親1200名を対象に質問紙法による実態・意識調査による。

結果 親子の接触度はかならずしも低くない。子どもの母親にたいする期待は、①相談相手になってくれる②遊ばせにつれていってくれる③お小遣いをくれること、の順が多い。これに対して母親は、みずからの役割の重要度を①相談相手②健康管理③しつけ、と考えている。しかし、子どもが悩みごとの相談にのってほしいのは、母親よりも友だちがはるかに多く、父親にいたっては論外である。ここに子どもの相談相手としての母親の役割期待について母親と子どもが一致しながら、その実がともなっていない現状をみることができる。また、母親自身が、ちかごろの母親遠行に欠けるのはしつけであって、子どもの相談相手と考えていない点にも母親と子どもの現状認識のずれがみられる。

一方、父親にたいする役割期待は、友だちのようなやさしさであり、経済的責任でも社会的権威でもない。父親もまた、しつけについての目標と権威を失っていて、子どもに追随するものが多く、このしつけ態度は子どもの生き方に影響している。